

犠牲者があったことを知り短い論文を書いた。

こんな人物がいたとは…観賞前、急ぎ予習し主人公について多少は知っていたが、映画の中で次々と悲劇と「試練」がコルチャックの周囲に起こり、彼と子ども達を「最後の行進」へと追い込んで行く一つのシーンが、抑えられない感涙でかすんだ。

日本はこの映画を通してコルチャックに出逢った。彼の子どもという人間に対する探究の態度や思想はその後の研究で理解できたが、まちががなくその態度や思想の延長線上に彼の「最後の行進」(子どもたちと共に死に向かっていった)があり、ワイダ監督はそれを見事に描き切った。

この作品はそもそもはポーランドにおけるユダヤ人問題を主題とし、体制転換前からすでにその生

涯を映画化する構想があり、ワイダ監督がその意志を継ぎ実現したという(新保庄三『コルチャック先生と子どもたち』1996)。脚本をA・ホランドに委ね、コルチャックの『ゲッター日記』を中心に史実の再現を試み、彼の有名な発言が随所に織り込まれている。

次の場面が強く印象に残っている——孤児院のリーダー格の少年が恋するポーランド人少女との間を引き裂かれ、他方ゲッターの中で母親と死に別れたもう一人の少年と喧嘩騒ぎになる。「ユダヤ人なんていやだ!! 死にたい」と頭をかきむしる少年にコルチャックが、子どもにも死に対する権利があると語りかけ「君は人間だ」と勇気づける——このシーンをぜひ再度注目されたい。コルチャックとワイダの記憶すべきメッセージである。  
(つかもと ちひろ)

## 新作能「鎮魂」を観て

霜田 千代麿

「鎮魂」は東日本大震災の後、2012年3月5日「シアターX(カイ)」に於いて朗読の形で発表され、以来5年の時を経て、2016年11月、ポーランド公演に続いて、14日東京・国立能楽堂に於いて日本・ポーランド国際共同企画公演・新作能「鎮魂」—アウシュヴィッツ・フクシマの能として上演された(ヤドヴィガ[イガ]・ロドヴィッチ作、観世鍔之丞節付・作舞、笠井賢一演出)。

当日は天皇皇后両陛下も観劇された。2002年、両陛下がポーランドを訪問された折、通訳を務めたのがイガ・ロドヴィッチ氏である。また、本作の中には、2012年の歌会始に両陛下の詠まれた津波への鎮魂の和歌「津波来し時の岸边は如何なりしと見下ろす海は青く静まる」(天皇陛下)と「帰り来るを立ちて待てるに季のなく岸とふ文字を歳時記に見ず」(皇后陛下)が取り入れられ、創作の重要なモチーフとなっている。

自分は、本会の朗読会「午後のポエジア」(第62回例会、2012.6.16)で、イガの許可をえて「鎮魂」を朗読した事がある。その時は第一稿で、スッキリした作品であると、深く感じ入った事を覚えている。聞くと、今回は第五稿という事であった。

ここで自分なりの了解を述べると、「能」とは「タマシズメ」である。登場者(死者)も観客(生者)も、という事である。仏教とは特に深い関係がある。それと、他の演劇とは異なり「俳句」と同じ「省略」が日本文化の精神として大変重要な意味を持つ。

作品では、アウシュヴィッツ強制収容所で拷問のすえ非業の死をとげたアチュウ青年(後シテ、ロドヴィ

ッチ氏の叔父)と、東日本大震災の津波で流されたフクシマの少年(ツレ[福島から来た日本人]の息子)が重要な二本柱となっている。



(左) 霜田英麿、遠藤郁子  
イガ・ロドヴィッチ、筆者

さらに今回は加筆して、アウシュヴィッツ強制収容所博物館で20年間働き、5万人の日本人を案内してきた日本人が登場する(アイ)。彼は日本人がなぜこの博物館でガイドをするのかと自問して「記憶の場と呼ばれるアウシュヴィッツ博物館は、歴史と真実との出会いの場。フクシマとナガサキ、ヒロシマも同じ人類の負の遺産なのです。アウシュヴィッツと同じように記憶され、何故(なにゆえ)と問い、立ち止まり、そこから現代についても考えなければならぬのです」と語る。

最後に、観劇者としての素朴な感想を述べさせていただく事が許されるなら、(一)演目が長すぎる、(二)台本が未整理で、説明が多すぎる、(三)能の一番大切な時空を越えた省略がきいていない、などを挙げたい。お能とは異界からの使者たちが現れる場であり、使者たちの登場自体がメッセージ(伝言)であるから、セリフで全てを語らせる必要はない。

とは言え、ポーランドと日本の大きなテーマを新作能「鎮魂」として完成し、本格能として日本の能舞台で上演された関係者一人一人のご努力に、心からの敬意と賞賛の拍手を送ります。

(しもだ ちよまる、元グロトフスキ実験劇場研究生)